

烏森の魔女ゲーム 〈第3 ゲーム〉

海神アクアマリン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

黒月の魔女以外の魔女が動き出した。屈辱の魔女リアボリスはどのような戦い方をするのだろうか？

悪魔を連れる人間に勝ち目はあるのだろうか？

第3ゲームが開始される。リアボリスの紡ぐ物語はどこへ進むのか。クロノエルの真実につながるものだろうか。

目次

第1話	1
第2話	7
第3話	12
第4話	18
第5話	24
第6話	30
第3のお茶会	36
裏お茶会	41

第1話

2006年に起きた「烏森大量殺人事件」は魔女のゲームとして2度繰り返された。そして今回3度目が行われる。ゲームマスターを変えた第3ゲームは今までと違う。これまでとは違う物語をたどるだろう。

「きしやははは！よく逃げませんでしたね！薫さん！」

「ここで逃げるようじゃ。クロノエルに勝てるわけがない。だから、絶対に莉亜を倒してみせる。」

「第2ゲームの途中で姿を消した芽琉と、第2ゲームで屈辱を与えてくれた薫さんとバアルには、私と同じくらいの屈辱を味わわせてやる！」

この場で対戦相手が揃った。僕達の側は、僕とバアルとイポスとアイムの4人だ。魔女側は黒月の魔女見習いの莉亜1人だ。

「新しく薫さんと契約したお二人も私の復讐に付き合ってもらおうわ！」

2006年9月7日10時南野邸到着。

「うふふ。4年ぶりにここに来たけど、お屋敷は変わりないですね。」

「そりやそうだ。四年でそんなにも変わったらヤベエだろ。」

みんなで談笑しながらお屋敷に向かった。途中で使用人の神威君、美紅利ちゃん、弥勒ちゃん、業君に会った。そして、お屋敷に到着するとお祖父様と長男一家と隼人さんと清美さんと剛座さんが出迎えてくれた。

僕はそのまま食堂に向かい昼食を食べた。その後、大人は客間で体調を崩して自室に戻ったお祖父様以外で話し合うらしいから、子供達は若い使用人4人と一緒に花畑に遊びに行き、風が強くなってきたところで中に戻った。

「そろそろ夕食の時間だね。」

「お夕食楽しみだね。」

南野家のお食事はいつも豪華だった。でも、今日は特に豪華だった。4年ぶりにやってきた優妃をもてなすならこれくらいは当然だろう。

「きしし、ここまではいつも通りだよ。そして、今時が進み魔女の手紙が読まれた。お祖父様は自室で休んでいるから話を聞けない。この手紙について話し合いが始まるよ。きしし。」

「お父様。私達は席を外してゲストハウスに行きますね。」

「おう。今日はいとこ同士で楽しみな。」

そうして、食堂から子供は出て行った。

「優妃お姉さん。莉亜と芽琉はちよつと薔薇庭園に行つてくるね。ちよつと薔薇

を見たいんだ。」

「風も雨も強いから気を付けて行ってらっしゃい。」

「はい。気をつけて行ってきます。」

こうして莉亜と芽琉以外はゲストハウスに向かった。莉亜と芽琉は薔薇庭園に行った。

「莉亜。薔薇庭園に来てどうしたの？」

「どうして薔薇庭園に来たか。少しは理由に気づいてるんじゃないの？」

「駒の私も魔女であるから不満なの？黒月の魔女見習いさん。」

「黒月と白金と屈辱の魔女見習いの私があなたに不満？何を言ってるの？不満だからここに呼んだのではなく、屈辱を与えるために呼んだんだよ。今すぐここで叩き潰してあげる！」

「あなたが祝福されることはあり得ない。私が全力で倒す！」

2人が魔力ぶつけた時に爆発した。爆煙の中から莉亜が芽琉に至近距離で迫った。

「これでもくらえ！」

そう言つて莉亜は魔力の爆弾を投げつけた。芽琉はその爆発により少し吹っ飛ばされた。

「その程度だ私が負けるわけがないでしょ！次はこっちからだ。我に祝福を、我に祝福の炎を与え給え。」

その瞬間、金色の炎が莉亜に向かっていった。

「偉大なる神々よ。我に守護の結界を与え給え。」

莉亜も魔法を使用して結界で炎を防ぎきった。と思ったら炎の中から芽琉が剣を持って突っ込んできた。

「神の結界なら魔神の剣で切つてやる！」

「出来るものならやつてみるお！」

莉亜と芽琉は互いに力をぶつけ合った。この攻防はしばらく続いた。すると、莉亜の結界にヒビが入り割れた。芽琉の剣は莉亜の目の前で静止した。

「莉亜、残念だったね。やっぱり祝福されたのは私だったわね。この戦いの後処理は私がするわ。認められないなら第1の生贄になる？それとも第2の生贄？」

「好きにきなさい。第1の生贄はもう決まってるから後は大丈夫。」

「それなら第2の生贄に決定ね。good night！」

そう言つて芽琉は銃を作り出して莉亜の頭を貫いた。

「アマイモン、出てきなさい。」

「破滅の七姉妹、四女のアマイモン。ここに。」

「アマイモン、遺体の処理と現場の修復を任せたわ。私は戦闘開始と同時に張った防音結界を解くわ。」

「かしこまりました。」

「これは一体？」

「なぜゲームマスターが先に死んだの？」

「薫様。これは何かの作戦に違いありません。気をつけてください。」

「バアルの言う通り。何かを仕掛けてくるに決まってる。注意をし続けなないと。」

莉亜は突然大笑いを始めた。狂ったようなその笑い声にイポスとアイムは少し驚いた。

「きしゃーはっはっ！さすがにやり過ぎたわね。今回は私のゲームだから駒の芽琉に細工をして現在の祝福の魔女にしたのよ。その結果がこれ。私には分が悪いくらいに強かったわ。」

よく分からないがいつのまにか芽琉は姿を消して魔女になっていた。莉亜はそれが原因で怒っていたのにゲーム盤上で負けて見せた。意味がわからない展開だ。

「きしし、私が負けて死んだのが意味がわからないでしょ。その上魔法戦が行われた。もう思考がめちゃくちやだろうけど、これは真実よ。魔法戦は実際に行われた。さあ、これをどう否定してみせる？」

莉亜の攻撃が始まった。波乱になる可能性のある第3ゲーム。3つ目の悪夢の始まりだ。

第2話

魔法戦は実際に起きたという莉亜の主張。しかし、現場が修復されたのならもう一つの仮説が立てられる。

「莉亜、残念だけど君の主張を否定するよ。僕は魔法戦が行われなかったと言わせてもらうよ。」

「どういう意味？なぜそんな主張がまかり通るの？」

莉亜は驚きを隠せなかった。

「薫様が使ったのはシュレディンガーの猫箱です。箱を開けるまではどちらの説も真実となります。」

「めんどくさい。どちらも真実なら赤でどちらも宣言できるといふことか。」

莉亜はさらにおどましいオーラを出し始めた。そして莉亜は立ち上がって叫んだ。

「ヘルケイズ卿、アルクレア卿、ご覧になっていきますか？私はヘルケイズ卿と友人になりたい！だからこそ今ここでクロノエル卿を切り捨てます！私の覚悟もご覧くださいー！」

アルクレアという名を聞いて驚いた。他にも魔女がこのゲームに関わっているのがよく分かった。その瞬間、クロノエルが入室してきた。

「莉亜！今なんて言ったの？アルクレア卿？ヘルケイズ卿？まさか大魔女のお二人までこのゲームに手を出したと言うの！」

「クロノエル卿の後見人は確か、希望の魔女シャンベリア卿でしたよね。どうやらこのゲームの傍観者は4人のようですね。きしし、私は今からヘルケイズ卿を楽しませるためにこのゲームを紡ぎます。」

その時、莉亜の姿が変わり、ドス黒いドレスに大きな赤いリボンに変わった。

「屈辱の魔女リアボリスは第3ゲームのゲームマスターとして復讐してやる！」

「くつ、裏にあの魔女がいるなんて、私に手出しが出来ないなら今回は私も大人しく観劇させてもらうとするか。うふふ。黒月の魔女を裏切れることは許すわ。でも、魔女になったのなら負けは許されないことを知るがいいわ。きゃーはっはっ！」

そうしてクロノエルは退出した。自信満々に莉亜は言った。

「薫さん、今度からは私のことを屈辱の魔女リアボリスと呼んでください。そして、ここに宣言します。あなた達は私に屈辱を与えられるだろう。」

「なかなか面白い展開になってきたね。バアル、イポス、アイム、新しい魔女のリアボリス卿に失礼がないようにしましょう。」

「かしこまりました。」

「主人の仰せのままに。」

「承知いたしました。」

リアボリスは言った。

「今ゲームの進行を中断しました。それと傍観者にも見られないようにしました。」

「なぜそんなことを？」

リアボリスは振り返って涙を浮かべた笑顔で言いました。

「この私のゲームに付き合ってくれてありがとう。『私は全てを生まれた時から嫌って恨んで妬んできました』だから双子の妹もいつか恨む時が来たでしょう。いつもそれを嘘偽りで隠してきました。だから、屈辱と復讐と憎悪の魔女になるのは必然的なことです。それでも、これであらゆる苦しみを負ってきた私は魔女として解放される。元お師匠様のゲームに付き合ってくれてありがとう。」

そこで話は途切れ、再びドス黒いオーラを放ち始めた。

「でもこれじゃあ、私らしくないね！復讐の魔女として復讐する！屈辱の魔女として屈辱を味わわせてやる！さあ、ゲームの再開だ！私の第1の殺人をとくと見よ！」

僕はほとんどもない奴らを相手にしていることに今気がついた。魔女側も大きな

思いを胸に、苦しみながら戦っているのを知って少し同情の気持ちちが芽生えた。しかし、手を抜く気は無かった。

「おつ、芽琉か。遅かったな。どうしたんだぜ？」

「莉亜が疲れたと言って寝ました。」

優妃は立ち上がった。いった。

「そうなのね。どんな寝顔なのか見せてもらおうね。」

「どうぞ、莉亜と芽琉の部屋についてきてください。」

そして優妃は莉亜の様子を見に行つた。莉亜は客室のベッドの上にいた。気持ちよさそうに寝ているように見えたのを確認して優妃はいとこ部屋に戻つた。すでに9時をまわっていたので芽琉も寝ることにした。

その後、24時まで全員が眠りについた。

「あれ？もう6時だ。朝だね。莉亜も起きたかな？」

芽琉が莉亜を確認すると寝ているように見えたが、近づいてみると異変に気づいた。布団が赤くなつていた。めくつてみると胸に穴が開いていた。さらに頭をずらすと枕も赤なつていて、頭に穴が開いているのを確認できた。

その瞬間、芽琉は叫ぶよりも他のいとこの元に行くのが最優先だと思つた。

「誰か起きてませんか！大変です！莉亜が死んでいます！」

芽琉がそう言うのと中から叫び声が聞こえた。そして奏太によって扉が開けられた。中から出てきた奏太は恐怖で顔がこわばっていた。

「芽琉ちゃん、優妃も死んでるよ。」

そう奏太に言われて芽琉は中に入り優妃の様子を確認した。優妃は胸を切り開かれて心臓を取り出されていた。取り出された心臓は枕元で皿の上に置かれた状態で燃やされていた。どちらの部屋も鍵は閉められていて密室だった。

それから薫が使用人と大人を呼びにいった。彩芽の検死によると2人とも死後3時間以上経っていた。しかし、ここでは死後何時間経過したのか。正確な時間は分からない。どうして2人が死ぬことになったのだろうか？

魔女達が牙を剥き始めた。動き出す魔女はゲームをどう変えてしまうのだろうか？

第3話

「まさか、今まで犯人だと思っていた優妃と莉亜が死ぬなんてね。」

「リアボリス卿は自分の駒を消して犯人から除外されるようにするのが目的ですか？」

「そんなつもりは無いですよ。それに、『優妃、莉亜の2人は死亡している』こうやって赤で言える私なら無駄なことよ。」

確かに無駄だ。赤で死亡を確定できるなら犯人にはなれない。それなら他に犯人がいるだろう。

「リアボリス卿。あなた、何を考えいるんですか？この未来が実現すれば危険ですよ。」

イポスはどうかやら未来を見たようだ。それもイポスがものすごく怒るような未来を見たようだ。

「私は屈辱を晴らすためなら何でもしますよ。それがもしも魔女の命を奪うことだとしてもね。」

リアボリスは一瞬悲しい表情した。もしかしたらクロノエルとリアボリスの知

る真実は彼女にとって悲しいものなのかもしれない。

「リアボリスに質問だよ。このゲームのルールはクロノエルのゲームと同じと考えていいかな。」

「クロノエル卿のゲーム盤を借りてますので、ルールはそのままです。さあ、どこからでもかかってきなさい！」

ルールが一緒なら助かる。第1ゲームと第2ゲームで少し鍛えられている僕にはやりやすい。

「それなら始めよう。バアル、第1の殺人人を再構築してくれ。」

「かしこまりました。第1の殺人現場はゲストハウスの客室201号室と203号室です。優妃の遺体を201号室で発見。遺体は胸を開かれ心臓を取られて焼かれました。莉亜の遺体を203号室で発見。胸と頭に穴が開いてました。そして当時犯行現場は密室でした。」

密室なのはいつも通りだ。しかし、アリバイトリックを得意とするリアボリスは何をしてくるか分からない。

「まずは復唱要求だ。芽琉、薫、奏太、芽亜里は犯人では無い。」

「復唱を拒否。理由は明かさない。」

「それならもう一つ復唱要求。源蔵、秋楽、相馬、紫音、優香、春香、彩芽、蓮司、

城助は犯人では無い。」

「それも拒否するわ。理由は明かさない。」

これで一族の誰かが犯人の可能性が高くなった。後は使用人だ。

「さらに復唱要求。隼人、神威、美紅利、弥勒、業、剛座、清美、美代子は犯人では無い。」

「それは受けるわ。『隼人、神威、美紅利、弥勒、業、剛座、清美、美代子は犯人では無い』」

これはマズイ、マスターキーを持つ人間が犯人では無いのが確定してしまった。これだと密室トリックが出来てしまう。クロノエルなら使用人の可能性を残して密室では無い可能性を作るのに、リアボリスは密室トリックがあることを示してきた。これは厄介だ。

「優妃を殺した犯人はその後に莉亜を殺した。この順番に間違いはないかい？」
「その順番で間違い無いよ。儀式通りの順番で殺されるんだからね。」

それなら優妃を殺してから莉亜を殺すトリックを考えないといけない。検死が完璧だとは赤で言われてない以上、正確な時間は分からない。だから、いくつか方法が思いつく。

「それなら、優妃は犯人に指定の時間になったら扉を開けるように言ったんだ。

秘密の話があるとか言って開けさせて、犯人は中に入り優妃の口を抑えるか睡眠薬を使ったりして黙らせて胸を開き心臓を取って殺したんだ。その後内側から扉の鍵を閉めて閉じたんだ。あの扉は開いている状態で鍵を閉めてから扉を閉じれば鍵がかかるような仕組みになってるからこのトリックが使える。」

これで優妃のトリックは完成だ。次に考えるのは莉亜のトリックだ。

「次に莉亜だ。莉亜は完全に眠っていたから芽琉が何かしたのかもかもしれない。」

「ちよつと待つてください。カオル卿、アイムが発言します。復唱要求です。莉亜の遺体は死亡時刻を偽装されていない。」

「うっ。その復唱は拒否するわ。理由は言わないわ。」

「つまり、死亡時刻は偽装されてるわけですね。芽琉が犯人なら時間操作トリックを使うでしょう。客室の冷房を使って死亡時刻を優妃の後にしたのでしょうか。アイムは時間操作トリックならこれくらいの推理ができます。」

「すごい、アイムは僕と違う答えに至った。それにアイムの推理は赤で肯定も否定もどちらさせずに、復唱拒否で封じてしまった。これは僕の出る幕じやないみたいだ。」

「よくやったよ。アイム、褒めてあげるよ。」

「お褒め頂きありがとうございます。」

その時、リアボリスが大声で言った。

「まだだ！時間操作をしたというならどのタイミングで殺したというの！」

「芽琉がいとこ達に顔を見せた時には死んでいたのでしよう。それに芽琉が遺体を発見した時に、叫び声をあげなかったのも気になります。自作自演だからこそ叫び声をあげなかったのでは？」

「きしし、『芽琉は優妃死亡時刻には眠っていた』これで莉亜は可能だとしても優妃は不可能になったわ。」

リアボリスはとても焦っていた。現状はピンチな状態だろう。クロノエルならとつくにリザインしてるだろう。だが、リアボリスは出来る限り逃げようとするようだ。

「莉亜を第2の生贄にするなら対になるものを選ぶ必要がある。莉亜と芽琉が選んだ相手が莉亜なら第2の生贄に選ばれた理由が分かる。それに第1ゲームでは犯人に協力者がいた。それなら今回も犯人は2以上の可能性がある。」

「きしし、『莉亜は第2の生贄である』『優妃は第1の生贄である』それと『犯人は1人では無い』これで推理を訂正できる？」

それなら簡単にできるが、何か妙だ。なんか罠っぽい。

「ああ、もう一つ赤で言うね。『真犯人は1人である』これは真実であり、共犯を含めて2人以上、真犯人だけで1人である。きしし。」

意味がわからない。なぜそんなことになるのか。決まった共犯はいないということなのか？全くわからない。

リアボリスに突きつけられた犯人と真犯人の人数。おかしい点をいくつも抱えるこの真実を掴み取れるのだろうか？

第4話

リアボリスに突きつけられた犯人と真犯人の人数に混乱させられている。一体誰が真犯人で誰が共犯者なのだろうか。

「リアボリス卿、これでよかったですか？ 共犯を暴けなくても真犯人を見つけ、動機を探して人間が犯人であることを証明してしまえばこのゲームは終わりますよ。」

「あなたにあんな風に言われたから最悪な未来は避けたつもりだよ。それでもダメだった？」

「いえ、それが最善の策でしょう。現にカオル卿が混乱してしまっているのですから。」

「きしし、そうだね。」

リアボリスは頭を抱える僕をあざ笑うかのように見つめていた。そして言った。

「きしし、いつまでも一つのことばで悩ませてやらないよ。もうゲームは進んでいくんだからね。先に進むよ！」

僕達には意味がわからなかった。僕達はいつから死んだ優妃と共にいたのだろ

うか？それに芽琉もいつから死んだ莉亜と一緒にいたのだろうか。こんな状況じゃ正確な検死は期待できない。だから死亡時刻も違うのかもしれない。

「あの2人が死んだのなら全員、ゲストハウスから出ない方がいいだろう。」

「秋楽お兄様に賛成だけど、いつまでお父様は泣いてるつもりなのかしら？」

「まあ、そう言つてやるなつて、紫音だつて少しはその気持ちかわかるだろ。」

ゲストハウスの客間の隅のソファに座つてお祖父様はずつと泣いていた。大好きな孫が死んだのだから泣いていても仕方ないが、壁際で泣いていて酷い顔になつてしまつている芽琉と比べればまだマシだ。今は泣いていないが暗い顔で壁に寄りかかつて窓を見つめていた。

「芽琉ちゃんも可愛そうね。私の娘はまだ顔が無事だからいいけど、莉亜ちゃんは胸に穴が開いただけじゃなくて頭もやられてるからね。二力所なんて可哀想だし、それを見つけてしまったのが芽琉ちゃんだもんね。しばらくは忘れることが出来ないわね。」

「いや、一生忘れられないだろうね。僕の娘たちはとても仲が良かった。毎日ずつと一緒にいて同じことをしてきた双子だ。その片方がいなくなることは残された方にとって自分の人生を失うのと同じことなのだろうよ。」

そんな大人の話を聞いてたのか芽琉が突然叫んだ。

「どうして莉亜が死なないといけないの！私にとつてかけがえのない双子の姉なのはどうして！どうして私の夢も憧れも失わないといけないの！」

叫び終えた芽琉は再び壁に寄りかかって窓の外の景色を見始めた。

「あそこまで苦しんでるとは、思わなかった。場所を変えよう。お屋敷の客間に行こう。お父さんと子供達と若い使用人はここに残っていなさい。」

「かしこまりました。」

そうして親たちはみんな姿を消した。

「親達がいなくなると静かだね。」

「それでも無いだろ。お祖父様が泣きまくってうるさいままだぜ。」

「芽亜里の言う通りだ。さすがにうるさくてウザいぜ。」

親達がいなくなつてからお祖父様を泣き止ませる役として弥勒がそばにつくことになつた。

「あれ？芽琉様はどこに行ったのかしら？」

「僕は知らないよ。業は知ってる？」

「俺も知らないよ。」

ちよつと待て、もしかして莉亜を殺した犯人に気づいて芽琉が殺しに行つたんじゃない。

「何かあったらいけないから、僕と芽亜里と奏太で探してくるよ。」

そう言つて僕達はゲストハウスの客間を飛び出した。玄関に向かう廊下の途中で芽琉が歩いているのを発見した。

「芽琉、どこに行つてたんだい？」

「莉亜の遺体が無事か確かめるために2階に行つてただけですよ。」

「そうか。まったく、心配かけやがつて。」

「本気で心配してたんだぜ。」

「まあ、何もなくて良かったよ。」

僕達が廊下で会話していると、玄関から焦つた様子の清美さんが入ってきた。

「た、大変です。旦那様と奥様が二階の貴賓室で亡くなっています。」

「なんだつて！」

その話を聞いてすぐに僕達はお屋敷の二階にある貴賓室に向かった。

「どうして、母さんと父さんが。」

貴賓室には腹を大きく切られた秋楽おじさんと手足を切り落とされた春香おばさんの遺体があった。清美さんと剛座さんが第1発見者らしい。その2人の話によると貴賓室は鍵が閉められていて密室だったらしい。そして、みんなにはアリバイがある。

そんな状況の中、芽亜里は大泣きした。それからしばらくして大人達がやってきた。遺体があゝの状態だから彩芽おばさんも検死の必要はないと判断した。

「さあ、第2の殺人が起きました！この密室のトリックを暴いてみなさい！」

「バアル、現場の再構築を頼むよ。」

「かしこまりました。第2の殺人、現場はお屋敷の二階貴賓室です。貴賓室にて秋楽と春香の遺体を発見。当時現場は密室です。」

「きしし、早速赤を使うね。『隼人、清美、剛座、美代子は犯人では無い』ついでに『お屋敷の扉は内鍵か部屋の鍵かマスターキー以外で閉める方法は無い』『扉は鍵がかかった時点で後から閉めることは出来ない』これであのトリックは使えないよ。」

一気に赤を使ってきた。その上、一つの手失った。それならどうやって鍵の開閉をしたと言うのだろうか？

「それなら、神威、美紅利、弥勒、業ならどうだ。このうちの誰からならゲストハウスを抜け出して犯行に及ぶことは可能だ。」

「『神威、美紅利、弥勒、業の4人は犯人では無い』ゲストハウスから出ることは出来ても、戻るまでにバレる可能性がある。」

「それなら、優妃と莉亜のどちらかが生きていて殺したんだ。」

「すでに赤で『優妃は第1の生贄である』『莉亜は第2の生贄である』と言つてい

るわ。言い直すなら『優妃と莉亜は死亡している』これで優妃犯人説も莉亜犯人説も使えないよ。」

貴賓室にたどり着ける人間が減っていく。とても難しい。今回は十分なアリバイトリックを用意して来たのかもしれない。

第2の殺人のトリックは強固だ。簡単には解けない。屈辱の魔女は厄介な戦い方をする。アリバイトリックと死亡時刻操作トリックを混ぜた密室トリックを暴けるのだろうか？

第5話

貴賓室のトリックはどうやって作ったのだろうか。ここまでの推理で犯行可能な人間は少なくなっていた。

「貴賓室での犯行は客間の大人達でも可能だ。何かしらの理由をつけて部屋を出て二階に向かい貴賓室で2人を殺害したんだ。」

「バカバカしい。『相馬、紫音、優香、彩芽、蓮司、城助は犯人では無い』あんまりバカバカしいことばかり言うと一緒に潰しに行くよ。」

魔女にバカバカしいと言われたのなら、もうあの手でいくしかなさそうだ。

「リアボリス、君はさつき真犯人は1人で共犯者を含めて2人以上だと言ったね。」

「言っただけどそれがどうかしたの？」

「今回の犯行は1人ではなく、2人で行われたんだ。共犯者は使用人の誰かでマスターキーを真犯人に渡したんだ。そして真犯人は貴賓室に向かい、2人を殺害してマスターキーを使い施錠して何もなかったかのようによの場所に戻ったんだ。」

「きしし、なかなかやるね。それなら、次に進むよー！」

僕は貴賓室で遺体を発見してから、大人はお屋敷で完全籠城、子供とお祖父様と若い使用人はゲストハウスで完全籠城することになった。何か緊急なことがない限り客間の扉は開かないことになった。

それから2時間が経過した。こちらでは何もなく静かにしていた。すると突然お祖父様が立ち上がって言った。

「我が子達が心配だ。少し様子を見に行ってくる。」

「お一人で出るのは危険です。お館様。」

「それなら、僕達全員で出たらどうかかな？」

「全員で警戒しながらなら少しは安全だと俺は思います。だから、薫様に賛成です。」

それからみんなの了承を得て全員でお屋敷の大人達のところに行くことになった。

お屋敷の扉に着くと扉にはちゃんと鍵がかかっていた。美紅利が扉を開けて中に入り客室に向かった。客室の扉を開けると中には相馬と彩芽の遺体があった。それと、地下ボイラー室にくるように書かれた手紙があった。

地下ボイラー室に行くのと城助と優香の遺体が発見された。側に使用人室にくるように書かれた手紙があった。

使用人室に行くとな隼人と剛座と清美と美代子と蓮司と紫音の遺体と一緒にマスターキーも部屋の鍵も全て当主の部屋に封じたりと書かれた手紙が置かれていた。

当主の部屋に入ると、当主の机の上に全ての鍵が置かれていた。生きている使用人のマスターキー以外があることを確認したから間違いない。

「この2時間の間にどうしたらこれだけの人が殺せて、こんな密室トリックが作れるというの!」

芽琉が叫んだ。僕達がこうしてる間にも刻一刻と時間は過ぎていく。今は午後8時だ。

「くふふ。犯人が魔女なら当主部屋にこもろうよ。お祖父様の術式と私の術式があれば少しは時間稼ぎができると思うよ。」

芽琉の申し出に従って僕達は当主部屋に閉じこもった。するとお祖父様と芽琉が何かの魔法陣を壁とかに書き始めた。

「これでどうにかなればいいが。」

「これでダメならもうなすすべがないね。」

こうして当主部屋での籠城が始まった。

「きしやははは!どうですか!私の自信作!最高の出来でしょ!」

僕は大笑いするリアボリスに対して笑って見せた。

「あははは！それが君の自信作だつて？笑わせないでくれるかな？そんなものにも穴はきつとある。そこを突いて君を倒してみせるよ！」

「はあ？出来るものならやつてみな！薫さんごときに解けるものなら解いてみる！」

まずは全員の死亡を確定させた方がいいだろう。

「復唱要求だ。相馬、彩芽、蓮司、紫音、城助、優香、隼人、剛座、清美、美代子は死亡している。」

「受けて立つよ。『相馬、彩芽、蓮司、紫音、城助、優香、隼人、剛座、清美、美代子は死亡している』ついでだよ。『相馬は第5の生贄である』『彩芽は第6の生贄である』『蓮司は第7の生贄である』『紫音は第8の生贄である』『城助、優香、隼人、剛座、清美、美代子は第9の生贄である』」

つまり殺された順番的には客間、ボイラー室、使用人室の順番に殺されたのだろう。しかし、鍵をどのタイミングで当主部屋に封じたのか。それによつては推理を変えなくてはならないな。

「ああ、言い忘れてたけど、『鍵は第3の殺人前に当主部屋に封じられた』つまり、不可能犯罪よ。」

これで推理がほとんど決定したが、一体どうしてこんなことになったのだろうか

?

「それならば復唱要求だ。扉は全て鍵がかけられていた。もう一つ、窓は鍵がかけられていた。」

「きしし、あなたが何をしようとしてるか分かったよ。復唱を拒否するよ。これが密室だったのなら、また2人で片付ける気なんですよ。片方が鍵を渡し、もう片方が殺人を行う。それを使おうとしてたなら愚かだよ。『ゲストハウスから誰も外に出ていない』これでアリバイが証明出来たよ。さあ、どうする？」

そんな、アリバイがあつて犯行不能ならどうして第3の殺人が起こつたというんだ。

「ゲストハウスから出ずに殺すことなんて不可能だ。どうやつても出来るはずがない。」

「あれえ？諦めるんですか？私達魔女に屈しちゃうんですかあ？きしやははは！もつと屈辱的な顔をしてくださいよ。敗者になるならそうしてくださいよ。」

リアボリスに負けを認めれば全てが終わる。バアルと共に現実に戻ることもできない。クロノエルとの決着もつけられない。どうすればいいんだ。

「リアボリス卿、私がお相手します。薫様は離れたところで見ていてください。」
僕がうなだれているとバアルが一步前に出て宣言した。

バアルがリアボリスと対峙する。悪魔が魔女を止められるのだろうか？

第6話

「バアル。魔女である私に勝てるかと本気で思ってるのかな？ 私は屈辱の魔女よ。屈辱的な負けになっても知らないよ。」

「承知の上です。『私は薫様の彼女です』彼氏がボロボロにされて黙っていられると思いますか？」

その時、リアボリスはニヤリと笑った。

「どうせ残りはほつといても死ぬんだし、それなら最終戦にふさわしい戦いをしようよ。あなたが負けたら屈辱的に消えてもらうよ。」

「私が勝つたら第3ゲームは終了でもうあなたは手を出さないでください。」

「約束するよ。屈辱の魔女は勝とうと負けようと関係ない。どうなろうと相手に屈辱を与えればそれでいいんだよ。」

僕はイポスとアイムによって対局席を降ろされて部屋の端の椅子に座らされた。空いた対局席にはバアルが座った。

「それでは参ります！ ゲストハウスとお屋敷をつなぐ秘密の地下通路がある。」

『ゲストハウスとお屋敷をつなぐ秘密の地下通路は存在しない』次はどうくるの

「秘密の地下通路は存在する。」

「うっ。『森の中に秘密の地下通路は存在する』」

「改ざんされています！森の中ではなく。敷地内ならどうですか？」

「きしし、薫さんよりやるね。楽しいよ。でも、時間切れが近いよ。きしし。」

時計を見ると10時を回っていた。このゲームは制限時間8日の24時までだ。時間切れまでにかたをつけないといけない。

「薫様。耳を塞いでください。それと目も閉じてください。リアボリス卿はあなたのことです。その最後が醜い姿だと可哀想です。」

「何をやる気なの！まさか私を消す気なの！そんなこと許さない！」

リアボリスは慌てて席を立った。その瞬間イボスとアィムがリアボリスを押しえつけて座らせた。

「リアボリス卿。まだ退席なさるには早いですよ。」

「リアボリス卿。最後までお付き合ってください。」

リアボリスは必死に抵抗した。

「離せ！私はまだ終わりたくない！屈辱の魔女がこんな屈辱的な負け方をしてたまるか！」

リアボリスが暴れてる中、バアルは僕に言った。

「悪魔は赤を使えます。その赤でリアボリス卿のトリックを全て潰します。そうすればリアボリス卿はその姿を保てなくなるかもしれません。だから、耳を塞いで目を閉じてあげてください。お願いします。」

僕はバアルの言う通りに耳を塞いで目を閉じた。それを確認してからバアルはリアボリスの方を向いて赤で何かを言った。

僕が目を開けると対局席にリアボリスの姿はなかった。しかし、バアルは驚いた顔をしていた。もしかしたらリアボリスに逃げられたのかもしれない。

「おやおや、リアボリス卿を退けるとは。薫さんとバアルは最高のコンビですね。」

僕は席を立ち上がった。突然姿を現したクロノエルは不敵な笑みを浮かべていた。

「きやははは！それにしてもリアボリス卿の最後は無様であった。自分が消される危険を察知して半分以上の魔力を消費して脱出するとは。まあ、リアボリス卿が逃げたのらまだ戦えるということだ。」

確かに、逃げたのなら再び姿を現して僕達と戦えるということだ。あんな屈辱的な負け方をしたのなら復習にくるかもしれない。用心しないと。

「しかし、第3ゲームを終えてもまだ私は完成していない。だから次のゲームマスターも別の者に任せるつもりだ。」

「次は誰が相手なんだ。」

「祝福の魔女メルヘリア卿だ。ついでに屈辱の魔女リアボリス卿も仲直りしてくるらしい。絶望の魔女ヘルケイズ卿が無理矢理にでも仲直りさせるらしい。」

さつきバアルが倒したばかりなのに、もう奴が姿をあらわすのか。絶対に復讐しにくるに決まってる。

「言っておくが、メルヘリア卿は私とリアボリス卿とは比べ物にならないくらいの大魔女だ。第3ゲーム中にどこかの魔女4人を倒したらしい。そして、その4人はメルヘリア卿の友となったらしいぞ。」

なんとということだ。クロノエルよりも厄介な相手なんてタチが悪い。それに加えて他の魔女まで味方につけているとは。

「そういえば、メルヘリア卿がウィッチガーデンという場所と組織を作られたらしい。これほどの才能があるなら私の元を離れても仕方ないな。」

「なあ、クロノエル。もしも、あんたのこのゲーム盤をメルヘリアが奪うと言ったらどうする？」

「その時はちゃんと考えるさ。まあ、そなたは覚悟することだな！メルヘリア卿

が本気を出せば私でも太刀打ちできないぞー！さあ、どう戦うー！きゃはははー！」

クロノエルが大笑いしてる間に第3ゲームが終了した。今回は対戦相手が途中退場したから引き分けにするらしい。

『南野源蔵。魔女の生贄として死亡。』

『南野秋楽。第3の生贄として死亡。』

『南野相馬。第5の生贄として死亡。』

『南野紫音。第9の生贄として死亡。』

『南野優香。第8の生贄として死亡。』

『南野芽亜里。魔女の生贄として死亡。』

『南野優妃。第1の生贄として死亡。』

『南野薫。魔女の生贄として死亡。』

『南野奏太。魔女の生贄として死亡。』

『南野莉亜。第2の生贄として死亡。』

『南野芽琉。魔女の生贄として死亡。』

『南野春香。第4の生贄として死亡。』

『南野彩芽。第6の生贄として死亡。』

『南野蓮司。第9の生贄として死亡。』

『南野城助。第7の生贄として死亡。』

『露御寺隼人。第9の生贄として死亡。』

『桐崎剛座。第9の生贄として死亡。』

『照間清美。第9の生贄として死亡。』

『安藤美代子。第9の生贄として死亡。』

『神威。魔法の生贄として死亡。』

『美紅利。魔法の生贄として死亡。』

『弥勒。魔法の生贄として死亡。』

『業。魔法の生贄として死亡。』

屈辱的な死を迎えた者もいただろう。屈辱の魔法は残酷なゲームを作りました。しかし、祝福されるであろう者には無駄に終わるだろう。屈辱は祝福に勝てない。

烏森の魔法ゲーム。第3ゲーム。生き残れた者なし。

第3のお茶会

僕達は薔薇庭園に来ていた。そこには僕とバアルとイポスとアィム、そして嫉妬の魔女アルクレアがいた。

「まずはこの第3ゲームを乗り切れたことを褒めてあげるわ。でも、次は簡単に勝てないわよ。メルヘリア卿は私が嫉妬するくらい強いんだからね。」

「嫉妬の魔女が嫉妬するなんて、相当な相手だと考えた方がいいね。」

「私は全力で薰さんをサポートします。」

「悪いけど、私とアィムは第4ゲームには参加しません。」

イポスが僕の側によって言った。

「カオル卿。無理しすぎです。悪魔を三人も召喚して維持するにはかなり魔力を消費します。ソロモン72柱の1位と22位と23位なら通常よりたくさん魔力を消費します。それがキツイのは第3ゲーム中顔に出てましたよ。」

「確かに無理をしていたようだ。それならイポスとアィムにはしばらく休んでもらうね。」

「また何かご用があれば呼んでください。すぐにお力になります。」

「私も呼ばればすぐに駆けつけます。」

そう言うって2人は姿を消した。

「さて、そろそろ私がここにきた理由を話そうかな。」

「一体どんな重要な話をするというんですか?」

「とつても大切な話よ。今後のゲームが荒れるかもしれないわ。今のうちにあなたを心中で恨んでいるクロノエルと手を組んだ方がいいかもしれないわ。」

えっ? どういうことだろう。僕がクロノエルに何かしたのか? それとも優妃の時に何かをしてしまったのか? それに今後のゲームが荒れるってどういうことだ。

「南野空と南野零羅を知ってるかしら? 南野空はお屋敷に隠れている誰かの隠し子よ。南野零羅はレイラ・クロノエルという未来の魔女よ。どちらも2006年の親族会議には参加しなかったわ。」

「零羅のことは知ってるよ。当時12歳だった莉亜と芽琉の妹で、当日風邪をひいて親族会議を欠席した10歳の女の子だ。空も噂くらいなら聞いたことがある。」

「その2人に魔女が接触したわ。六軒島にも手を出した絶対の魔女ラムダデルタと奇跡の魔女ベルカステルよ。あの2人はちよつと手を出しただけで、実際に手を出したのは希望の魔女シャンベリアと絶望の魔女ヘルケイズよ。」

あの2人の魔女ならあり得る。あの2人は仲が悪いとバアルから聞きていた。

そんな2人なら手駒を用意して、どちらが先に勝つかを賭けていても不思議じゃない。

「言っておくけど、私はいまだにあなたを魔術師に推薦してるわ。あなた次第ですぐに魔術師になれるわよ。そんなあなたに私が旅したカケラの中で見つけた南野空について話すわ。」

そうアルクレアは言って語り始めた。

「あまり言うべきではないと思うけど、南野空は可哀想な人生を歩んでいるわ。お屋敷のどこかに隠されている彼女は最後の親族会議の日に、安全な場所にいたから無事生還できたのよ。他に優妃、莉亜、芽琉も生き残った。しかし、私が見たのはカケラだから真実とは限らない。でも、『南野空は実在する』これは真実よ。それともう一つ『薫と美紅利は2014年では生きています』つまり2人は無事に帰れることが保証されたわ。」

アルクレアが言うことが本当なら僕達はこのゲームで戦って正解だった。優妃は昔から約束は破らない子だった。それは魔女になっても変わらないらしい。

「南野空が誰かの隠し子だと言ったわね。誰の隠し子なのかは言えないわ。言っても信じないだろうからね。でも、南野空はいつも泣いてたわ。一人寂しく隠れて泣いてた。私はそれをいくつもカケラで見たわ。これ以上はクロノエルの邪魔が入るだろうから言えないわ。」

「アルクレア。そこまで空のことを教えてくれてありがとう。ついでに零羅についても話してくれないか。」

「分かったわ。零羅のことも話してあげる。」

アルクレアは一瞬苦々しげな表情をしてから話し始めた。

「零羅は2014年に烏森の真実を探し始めたわ。その際に魔女のいる上層世界と人間の住む下層世界の両方を旅し始めたわ。黒月と白金と創造の魔女として上層世界にやって来た。だからそのうち姿を現わすわ。下層世界の零羅は莉亜と芽琉の遺品からいろいろな情報を得て真実を拾い始めたみたいよ。私は零羅についてこれ以上は知らないわ。」

「零羅のことはまで教えてくれてありがとう。アルクレアには感謝しかない。」

「言っておくけど、あなた達の運命だって確定されたものじゃないのよ。黒月の魔女なら、あなた達を彼女の求める答えにたどり着かせる気はないわ。そして、絶対に現実世界に帰させない気よ。でも、自分のゲームが荒らされればさすがにあの子もあなたと手を組むはずよ。その時は拒絶せずに絶対に手を組みなさい。これが今私に出来るアドバイスよ。」

「アドバイスまでもらえるなんて恐縮だよ。胸に刻んでおくよ。」

アルクレアは心配そうな顔をしながら何も言わずに姿を消した。
第4ゲームを無事に迎えられるか少し不安が生まれた。南野空とは一体何者なのか。
そして、南野零羅はどこで姿を現わすというのだろうか。

裏お茶会

魔女達は喫茶室に集まっていた。

「うふふ。まさか、リアボリス卿があそこまでやれるなんてね。見直したわ。」

「アルクレア卿。お褒め頂き恐縮です。」

「でも、詰めが甘いですよ。最後にはバアルにトドメを刺されそうになってヒヤヒヤしましたよ。」

「それは仕方なかったんですよ。クロノエル卿からの指示だったのでね。もう少しゲームを盛りあげると仰せだったのですよ。」

「うふふ。お陰でまだ退屈せずに遊べそうだわ。」

その時、魔女の2人が遅れてやってきた。

「遅れて悪かったわね。ベルンがなかなか出てきてくれなくてね。」

「仕方ないでしょ。色々準備に時間がかかるのよ。」

「ラムダデルタ卿、ベルンカステル卿、今日はお越しいただき誠にありがとうございます。」

クロノエルは来客に頭を下げて挨拶した。

「別に頭を下げなくてもいいわよ。今日はクロノエル卿主催のお茶会に顔を出したかっただけだからね。」

「私達は部外者だから少し過去のゲームを見させてもらったら帰るつもりよ。」

「少しゲームに手を出しておきながら帰るとは。まあ、本気で手を出して無いのなら帰ってもらった方がこちらにはやりやすいから構わないけどね。」

それからメンバーが集まりお茶会が開始された。

「まずはメルヘリア卿のウィッチガールデン設立を祝うとしよう。おめでとう。」

「祝福の魔女を祝福していただきありがとうございます。」

「クロノエル卿、第4ゲームは誰がゲームマスターを務めるのかしら?」

「次のゲームマスターはメルヘリア卿とリアボリス卿に任せるつもりだ。私は多分黒月の魔女として完成するだろうけど、状況が悪くならなければ動く気は無いわ。」

全魔女がホッと吐息をついた。

「うふふ。クロノエル卿。ホワイペルン卿は動く気がないからゲームを最後まで見届けてくれるだろうけど、アルクレア卿とヘルケイズ卿には気をつけた方がいいわ。」

「それは私からリアボリス卿とメルヘリア卿にも言えることです。元老院の大魔女たるヘルケイズ、シャンペリア、アルクレア、ベルンカステル、ラムダデルタは

あなた達では絶対に勝てない最上位の魔女です。気をつけてください。」

言われなくても気をつけるわよ。

「シャンベリア卿。ご忠告ありがとうございます。」

「ヘルケイズ卿。ご忠告感謝します。」

ヘルケイズとシャンベリアはアルクレアを見つめた。

「アルクレア卿。嫉妬の魔女であるあなたは動かないのですか?」

「私が嫉妬するくらいは駒をすでに動かしています。500年を生きている私に愛の力を見せてもらって楽しませてもらってます。」

その駒が誰なのか。クロノエルとリアボリスとメルヘリアには分かった。

「アルクレア卿。まさか、その駒というのは薫なのではあるまいな。」

「そのまさかよ。ひゃーはっはっ!あの子はとてもいい駒よ。そのうち面白いことが起こるわ。楽しみにしてなさい。」

そう言ってアルクレアは席を立った。

「私はそろそろ帰らせてもらうわ。お茶は十分に飲んだし、今後のゲームを予想して嫉妬を楽しみたいからね。」

そうしてアルクレアは退場した。

「私とベルンも帰るわ。もう過去のゲームを見終わったからね。私から一つ言う

なら、クロノエル卿もリアボリス卿も遊び過ぎよ。もつとしつかりやらないと六軒島の奴らみたいに苦勞するわよ。それじゃあ、バイバイ。」

さらにラムダデルタとベルンカステルも退場した。

「私も帰るわ。クロノエル卿が次にどうするのか。それと真のゲームマスターがどう動くのか。楽しみにしてるわ。」

「リアボリス卿、メルヘリア卿、第4ゲームも楽しみにしています。それじゃあ、失礼します。」

そして魔女の喫茶室にはクロノエルとリアボリスとメルヘリアとホワイペルンだけが残った。

「リアボリスは本当に詰めが甘いよ。私ならクロノエルとリアボリスよりもっと簡単に頑丈な密室を作るよ。」

ホワイペルンは今このお茶会で初めて口を開いた。

「ホワイペルン卿。そなたは口を出さないのではなかったか。」

「少しくらいはいいでしょ。前に教えた方法は薫には通用しないから新しい手を考えた方がいい。それと、クロノエルは気をつけな。リアボリスとメルヘリアは何をするか分からないだからね。」

「ホワイペルン卿のご忠告なら少しは聞いてあげますよ。まあ、この2人がどれ

くらい危険かは、私の方が知ってるでしょうけどね。きゃふふ、次回のゲームも楽しんでくださいね。」

魔女はゲームを重ねる。重ねて真実を隠していく。その魔女の手口は巧妙なものだ。隠そうという意思は破れるのだろうか？